

「影と実体」(2021. 1. 17)

律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。

(ヘブライ 10:1)

昨年のイブ礼拝はコロナ禍ということもあり、特別演奏として『メサイヤ』の5曲を聴いた。その中で、第21曲「Behold, the Lamp of God」「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」という合唱は、切なく痛々しくその響きに圧倒された。この言葉は、受洗直後の主イエスを指して、洗礼者ヨハネが発した証しである。



レビ記には犠牲を献げる時の規定が書いてある。奉納者がまずその動物の頭に手を置き、その動物を屠り、脂肪を取り出す。その脂肪を祭壇で焼く。その時こういう表現がある。「祭司は主を宥める香りとしてそれを祭壇で燃やして煙にする。祭司がこうして罪を贖う儀式を行うと、彼の罪は赦される。」(レビ 4:31) 脂肪を燃やして煙にする。するとそれが宥めの香りになり、こうして罪が赦されるという。

主イエスは世の罪を取り除く羊として屠られ、十字架で死なれた。この贖いの儀式と十字架の関係を「影と実体」という言葉を使って表現すると、レビ記の贖いの儀式は十字架の影であり、十字架はこの贖いの儀式の実体である。影は実体の背後にある意味を教えてくれる。つまり、イエス様が十字架上で執り成し祈り、私たちの罪の身代わりに死んで葬られたということは、それを視覚的象徴的に言えば、私たちの罪が燃やされ煙のように跡形もなく消えた、そして主への芳しい香りとなって天に消えた、そういうことである。キリストの御業が完全で、全き生贄であると信じるとは、こういうことである！

先日TGUの学生からこんな質問があった。「キリストは今も全世界のいけにえですか？」この質問は、「この方こそ、・・・全世界の罪を償ういけにえです。」(Iヨハネ 2:2)に対するもので、嬉しくなって、こう答えた。「今も、です！今も罪の赦しを与えます！」私の中に「永遠の贖い」(ヘブライ 9:12)の意味が新たにされた出来事だった。

全き生贄であるゆえに、私たちの罪は焼かれて煙となって消え、芳しい香りとなった。そして、その御業は永遠の贖いであり、過去も現在もいつまでも罪の赦しを与えるのだ。

豪雪の中でも、コロナ禍の中でも、変わる事のないこの恵みを信じ、この恵みに固く立って、愛されている神の子どもとして歩みたい。